国木田独歩の佐伯での生活（十七）

山内武麒
賛助会員
（佐伯市城下東町）

二月の記について書く

一日の記には先ず一昨日（一月三十日）の記を書いてある。

一昨日は大祭日（孝明天皇祭）であった。朝、富永徳磨と高橋庸吉の両君が来訪した。午後はまた尾間君と山口行一君が来訪した。富永・高橋が帰った後、尾間・山口両君と収二と四人で同道して散歩に出た。城山をめぐり岡の谷坂を越えて岡の谷に出て帰る。墓地の傍を通るとき、たまたま前から四五人の人が来る。その内の二人が柩をかついでくる。そしてそれを埋葬する様子を見た。

吾等止まりて埋葬を見る。彼等冷然として之れを埋め、見る者も又た冷然として観るなり。自然も亦た冷然として関する所あらず。凍雲暗くして山を掠めて去り、寒風も亦颯々として樹梢に鳴れども、一個人間の死屍を其土中に受納するに於て何の変はる所もあらず。而かも「死」なる法則は吾等人の上厳然として行はれつゝある大事実ならずや。怪しむ可きはこれ等の対照なり。

と、死屍を埋める光景を見て、余りにも冷然たるに対し死を考え、哀れさを感じている。

自然と人間と生死の三者の間に流通する秘密は依然として人は知ることは出来ない。知ることが出来なくても哲人はこれに対して真面目に考える。せめてそうありたいものである。それに何ということか、普通の人は何も感じるところがない。あやしむべき事実である。

と。感想をもらしている。

その晩夜がやゝ更けて長田君（学館生徒）が訪ねてきたので、自分の去年の「欺かざるの記」を拾い読みして聞かせた。

次に昨日のことを書いている。

昨日、朝起き出で窓を開いて眺むれば、元越山を始めとして灘山所々雲を見る。又地上薄く積み居たり。朝食後例の如く散歩を試む。飛雪片々、凍雲漠々、梅

花咲き出でたるを見るもあはれなり。

と、雪の朝の景色を叙してある。

昨夕、登校、門を出づれば仰ぎ見る満天の星彩、燦として眼を射る。無限の蒼空、悠々として懐に入るを覚ゆ。

と、登校の道すがらに見た空の景色である。

途中配達夫と出会って、今井君からの手紙をもらう。登校前に教会堂に行く。室内は真暗であった。すぐ出て散歩した。始業時間に少し早過ぎるからである。

帰って学校に入り、暫く校舎の片隅に住んでいる大工の老夫婦の室に行って話した。この老夫婦は詩料の種になりそうだ。

授業の終ったのは夜の十時半である。

独り暗夜をたどりて帰る。城山の方、西天雲漠々、家なき処に出づれば城山颯枯葉を鳴らして襲来す。寂寥たり四顧、暗憺たり。雲の絶間に星彩を見る。山黒く、風暗し。

と、寂莫とした冬の夜空を描いている。そしてその感想を述べてある。

急に思った。自分をこの時代、この境遇、この習慣からたち切って、たゞ一人として想像させよ、と。そして想像してみた。幾分か解った。少し自分の生命それ自身を感じたように覚えた。

然り、人は四顧の動物、四囲の奴隷、今日此処の外皮なり。

と、結論づけている。

昨夜学校から帰えり、夜更けてから「伊勢物語」を読んだ。左の節を読んで暗涙に咽んだ。

昔男、陸奥の国にすゞろ往き至りけり。そこなる女京の人はすゞらかにや覚えけん、切におもへる心なんありける。さてかの女

なかなかに恋に死なずば桑子にぞ
なりべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞ鄙びたりける。さすがに憐れとや思ひけんいきて寝にけり。

夜深く出にければ、女、

夜も明けばきつにはめなん腐鶏の
またきに鳴きて夫をやりつる

といへるに、男京へなん住めるとて云々。

そしてその感想を

古も今の如くで、今も古のようである。女は女で男は男である。そして情は情、恋は恋で、人は依然として人である。もしこの情やこの恋に、心の幽音哀調を感じるならば、古の人も今生きているようで、陸奥の乙女も自分の懐の中で呼吸しているようである。自分が暗涙を呑んだのは、この乙女に同情に堪えなかったからである。

四月の記には

吾快々として楽む能はず、何の故に楽む能はざるか吾これを知らず、知らずと雖も而も如何ともする能はず。書を読むの気力なく、事を為すの元気なし。只だ茫々として鬱憂の迷路に苦しむ。

と、不愉快で何もする気になれない。と記してある。

昨日もそうであった。一日中、一晩中そうであって、今朝もそうである。

たゞ時と人類の歴史の不思議なのに心を打たれ、自分の一生も結局はこの意味のない歴史の中の一片に過ぎないのかと疑い、またある時はこの大自然の無限無際を考えると、この一片の生命そのものを感じる。世の中の人々の苦難や災厄は快楽に耽り気まま勝手な振舞など種々様々であり、しかもその中に恋愛とか信実とか叫ばれる何という変り方か。

人生の奥、横、深さ、変化、一様なところ自分はその中のいくら知っているか。

吾の心を打つものをあげてみると、

恋情・美妙・災厄・情欲・社会・歴史・希望・義務・無限の時・無限のスペース・吾・普通の生活。などである。

と、自然・人生・歴史・社会・感情などについて感じたことを記してある。

五日の記には栂牟礼山に登ったことを記してある。

昨日午後栂牟礼山に登った。同行者は薬師寺育造、この人は教会の主任である。藤田（連次郎）・山口政策・長溝・岡崎（誠）・武石・尾間・以上は鶴谷学館生徒、そしてわれら兄弟と凡てで九人であった。

栂牟礼山は佐伯町から西へ去る一里の処にある、旧跡である。

豊後遺事に曰く

大友到明公ノ時、栂牟礼城主佐伯惟治ノ謀叛ヲ讃スル者アリ。公、臼杵長景ニ命ジテ之ヲ討セシム。栂牟礼城固ヨリ険ニ、士卒亦勇ナリ長景屢々攻ムレドモ勝タズ云々。

と、この文にあるようにこの山は大変けわしい。われわれ九名は三隊に分れて登った。

城趾は見る影もない。たゞ昔、この城趾に生い茂った松が年を経て薪となり、今はその朽ちた株が処々に点在しているのみである。この城趾がどれ位古いものかがよくわかる。

空が曇って雨が降ってきて峰をかすめた。あたりの光景は暗く物すごい。焚火をして暖をとった。

帰り道で一つの岩穴を探ってみた。かゞり火をかざして中に入ってみた。

と、ある。

この日、この登山のことを友人の大久保余所五郎に報らせてある。

昨日日曜日、近村の一山に攀づ。これ四百年前の城趾なり。僕近来佐伯の歴史などほぢくり居るが故に登りたる也。今は此山何の城らしき処もなけれども猶ほその峻嶮なること昔と異ならず、僕等学校の生徒等と嶮を凌びて登り、冬ながら流汗流るゝが如し。天時惨、凍雲連山を掠め、飛沫時に面を払ふて来る。吾等枯木を燃て暖をとる。人生代々、昔も今の如く、今も昔と異ならず吾等何時か太古の民たらん。僕生徒諸子を大声に呼んで曰く諸君太古の蛮民よと。

と、ある。

六日の記

昨日は月曜日であった。しかし風邪をひいて胸が痛いので登校を休んで、一日中床の中で暮した。

今日は収二を見送った。収二は今度われら兄弟によって計画した印刷事業のことについて父と相談し、柳井津の印刷業の実地をしらべさせるため、帰省させた。今朝彼れ収二を葛港まで送って港で袖を分って帰宅した。

独歩は父が裁判所を辞めて後職がなく、また収二の将来を考えて、柳井で印刷業を開設したらと考えて、兄弟でよく相談し計画したのであろう。

帰って机の上を見ると「国民の友」と吉見さんからの手紙とが置いてあった。「国民の友」を読んだ。

収二を送った。これは自分の上に行われた事実である。これを支配するものは何者か、過去・現在・将来、この世に於ける人間生活の事実、これを支配するものは何者か。変転・推移・災厄窮苦・慈愛相恋・生存競争など切れたりつゞいたりして連続して起る人間生存の事実を考え、またこの無限無際無辺の天地を思う。そして感ずる者は人間の生命そのものであり、宇宙の主宰者たる神そのものである。

と、収二を送った後の感じを述懐し、

吾、未だ嘗て、今日桂港よりの帰路、暗涙を呑んで皇天上帝に熱祷したる程、真実に宇宙・人生の主宰者に依頼哀願したる事あらず。

嗚呼、宇宙に於ける此の人間の生活を思ふ。然らば則ち上帝を思はざらんと欲するも能はず。

と、事業の成功と収二の無事とを祈っている。

七日の記

午前教科書の下調べをした後、テニソンの「イム・メモリアム」の首章を読んだ。その内に薬師寺育造氏が来訪して、富永徳磨君のことについて話した。午後富永君を訪うて話した。彼は今の不幸について多少大げさに言うところがある。

夕方一寸薬師寺君を訪うた。教育のことなどについて語った。

自分は「教育」という言葉に聞き慣れ、視慣れているが、一種の意味があると感じさせた。「人間の教育」は実に意義深い言葉である。

二月六日の富永日記を見ると、夕方長田君が訪ねて来たので炉ばたで話していると、自分の名を呼ぶ声がする。出て見ると薬師寺さんである。そして書斉で語り合った。この人も自分の前途について色々の心配して斡旋して呉れる一人である。この人の言うには君が今の職を辞めたらすぐ出て行くのがよかろう。国木田先生に頼んだことが出来なくても、と。そして更に先生にすがるのは依頼心が強すぎるというので、自分は考えがあって人に頼むのである。どうして依頼心が強いのであろうかと云った。

と、あり、また七日の記を見ると、

自分の名を呼んで訪ねて来たのは国木田先生である。書斉で語り合った。しかし自分から自分の願いを明さずにいると、先生はこれを察して言った。君の事情はわか

らないではない。しかし僕は真面目である。一般の人達がものを承諾するのとは違う。君のことについてするのは自分の義務である。手の届くことが出来ると信じるので民友社の徳富氏に言ってやろう。しかしこれを当てにしてはならない。何故なら民友社は東京に居る青年達が入社を希望する憧れの的である。十人の人に二十人の候補者がある状況であるから、十中八九は出来ないものと予期せよ。と云った。

と、ある。富永は電信局を辞めて独歩から推薦してもらって民友社へ入社したいと考えているが、薬師寺氏は人に依頼しては駄目だ、自分で探し出すべきだと云ったが、富永は独歩から話し出してくれ心から喜んでいる。

独歩の言った言葉の中に、自分は一般の人がものを承諾するのと同一視するな。自分は真面目である。君の将来のことについて出来るだけの骨折りをするのは僕の義務である。と言ったことは、師弟の愛情の深さをしみじみと感じさせる。

次に昨日のことをまた書いてある。

昨日、弟を桂港に送って別れての帰路、悲しみに堪えず神に祈った。

何故に悲しくなったのか、次々その心の中を記してある。

人間此世に生れて、労苦経営す。而かも無限無窮なる此宇宙間に漠々として頼る所なく、空として指す者なく、確として足据ゆる処なく、思へば只だ夫れ片々たる孤船。的処もなくあくがるゝ如し。然り若し愛の神、善の神、真の神存在するに有らざりよりは、

と、頼り少ない世の中を悲しみ、

弟は自分のために、弟自身の一生のために、また一家のために、いとなむ為めに航海の途についた。風と波とに運命をまかせた。

ここで自分は痛感した。人類に若し希望がなく、目的がなく、人に不死の栄なく、労苦に何の価値もないものであれば、人間とはただ夢中にもがく迷い子であるのみだ。

嗚呼、暗憺寂莫たる光景。怪風、岐路に迷ひ、松葉闇裡に鳴る。仰げば星影三四、雲の絶間にきらめき、黒雲深夜を覆ふて頭上に飄ふ。

これは学校からの帰路の光景である。そして感じた。

古も今、今も古、現在とは過去の異名であり、過去と

は現在のもと名である。自分はこの身を「今」という想から去って、たゞ人生連続の歴史の中を歩く心が起った。

と、ある。

次に

今日は旧正月二日なり。市民皆な遊ぶを見る。

と、ある。旧正月である。筆者達が子供の頃には旧正月が本当の正月らしかった。新暦の正月は学校や官庁では新年の儀式が挙げられ年始廻りなどしていたが、ほんの形式だけの正月であった。

昔、旧正月が近づくと、どの家でも杵音高く餅をつき大晦日にはご馳走を作って一家揃って年越しの膳につき元旦からは毎朝雑煮を祝って腹一ぱい食っていた。歌留多遊び独楽廻し、羽根つきをして楽しく遊んで、正月気分をゆっくりと味わったものである。

◎ 見学会のご案内

深島・屋形島探訪

日　　程　　七月二十四日（日）

集合場所　　蒲江町役場前　　午前十時十五分

出　　航　　蒲　江　港　　午前十時三十分

会　　費　　船賃・弁当代　　二千円程度

交　　通　　各自・大分バスをご利用下さい

路　　線　　佐伯駅発　　蒲江着

青山経由　　九時　五分　　九時四十分

畑野浦経由　　八時二十分　　十時　十分

申　　込

七月二十日まで

事務局佐藤方へ